

はじめに

私は、昭和四十九年に先代から家業である鍍金工場めっきを、富士市天間にて引き継ぎました。はじめは払下げを受けた廃校校舎が社屋でした。その後、昭和六十二年に、オートメーション化に合わせ、同じ富士市天間にて工場新築、さらに平成十五年に、現在の本社工場を富士宮市小泉に新設、天間の方は分工場とし、今日に至っております。

この間、経済社会変動の目まぐるしさは、現在中高年の方なら否応なくご記憶のことと存じます。昭和四十八年の第一次オイルショック、同じく昭和五四年の第二次オイルショック、平成三年のバブル崩壊、その後の眠れる十年が尾を引いてのいわば眠れる二十年と、多くの企業と同様、当社の経営も幾度となく景気の荒波にさらされて来ました。古くからの社員とともに、よく会社を持ちこたえてきたものと、一種感慨を覚えます。

ところで、このところ日本が借金大国であることがよく取り上げられます。国と地方を合

わせた債務残高は、約九〇〇兆円と気の遠くなるような額になっているようです。他方、日本の国民総資産は約一四〇〇兆円と、これまた想像のつきにくいほどの額になっています。少々乱暴ですが、この額を一億分の一にして家計に当てはめると、九〇〇万円の借金と、一四〇〇万円の財産とを併せ持つ家庭のようなものです。家庭の場合ですと、相応の財産はあるわけですから、夫婦や親子で話し合い、少々時間がかかっても借金を整理して、残った財産で生計を立て直すことも可能と思えます。これが、国や都道府県、あるいは市町村となると、仕組みがまるで違うため家計のように「見える化」できません。そのため、GDP世界二位〜三位でありながら、公的財政は火の車という理由も庶民には分かりづらいものがあります。過度の国債依存は後世に恨みを残すだけとか、消費税を大幅増税するか、デフレを脱却して景気が回復しないかぎり赤字が解消するほどの税収は見込めないなど、様々なことが論じられていますが、日本全体としては赤字大国ではないわけですから、システムの不具

合を改変することでこの苦境から脱する道があるのではないかと、素朴に思うこともありま
す。

同じように、（ヒトに資源という言葉を当ててるのを嫌う向きもあるようですが）人的資源
に関してもシステムが機能していないゆえの不具合が多々見られます。例えば、かつてのよ
うなサービス残業は減ってきているとは云え、超過勤務による過労死が相変わらず後を絶た
ないようです。一方巷には、就職を希望しながら、職に就けていない失業者や新卒者が大勢
います。カネの世界だけでなく、ヒトの世界も深刻なミスマッチがあるわけです。

些^いか視点を^ち変えてヒトのことに^ち関して申しますと、障害者と健常者という区分けも通常
なされます。当社ではここ数年、全従業員のうちに占める障害者の割合が概ね七割↓五割で
推移してきていますが、それぞれが得意分野を生かす一方、お互い少々不得手な分野に関し
てはできるかぎり補い合うように努め、工場の運営も各業務の遂行も全員体制ですすめてい

ます。もちろん簡単に現状に到達したわけではなく、当社業務に固有の特性を踏まえ、たうえで人的資源の募集採用から配置の組合せまで、折々のように調整を繰り返しながら、定着させた体制であります。このように全員参加の体制が実務上築けたからこそ、モチベーションの維持にもつながっていますし、当社特有の仲間意識や連帯感も生まれてきたものと思っています。

厚顔にも自社の例を引いてしまいましたが、社会人としての充足感とは、何と言っても、頼りにされることで意欲が湧く仕事に従事することではないでしょうか。勉強嫌いな子はめずらしくなくても、働くことが嫌いな子はあまりいないと、よく言われます。会社のルールの中で、自分の能力や努力の成果を認められて、お金や満足機会を得ることができれば、明日への生きていく力に結びつきます。繰り返しのようになりますが、仕事をしたという手応えを感じながら報酬も受けるというのが社会人として何よりの喜びになると思います。

この小冊子は、昭和から平成にかけて二十五年あまり、障害者を雇用し、障害者とともに働くことで経験した、様々な事例の集約として辿り着いた、私なりの、障害者雇用における、物心両面にわたる考え方のツボを、僭越ながら書かせていただきました。何かしら参考になれば幸いです。読みづらいところや勘違い等もあると思いますが、その点は甘んじてご指摘を受けます。縁あってこの小冊子を手にとっていただき感謝申し上げます。

平成二十二年四月 富士宮市小泉の本社工場にて

有限会社 フジ化学 代表取締役 遠藤 一秀